

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	広島市立春日野小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	主体的に学ぶ児童の育成 ～単元内自由進度学習の取組～

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 活動に至るまでの経緯

本校では、研究主題を「考えを伝え合うことよさを実感し深く学ぼうとする子どもの育成」とし、令和2年度より、研究教科を国語科に設定し、取組を進めてきた。研究を進めていく中で見えてきたのは、場の設定や単元づくりの工夫を行うことによって、目的意識・課題意識・必然性をもち、自分ごとの学びをし始める児童の姿である。自分ごとの学びになると、自然に、他者の考えにも興味をもち、学びが広がる伝え合いを始める。このような姿が見られたのは、①学習課題（テーマ）を自由に選択したり、自己決定したりできるものであったこと②付けたい力や学習方法を児童自身が十分理解できていたこと、という2点が作用していたからではないかと考えられる。

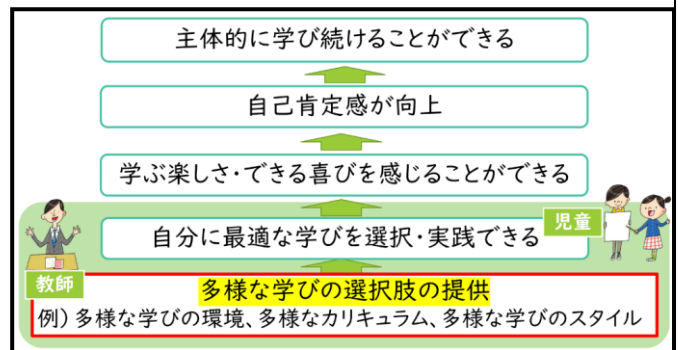
しかし、これらは、研究した国語科の、また単元内での児童の姿である。全体的には、一斉授業の中で、与えられた学習を何となく学ぶ児童の姿や学んでいるように見える児童の姿も見られる。また、今年度の振り返りからも、本校児童の全体的な傾向として、すべきことや学習に前向きに取り組むことができる一方で、主体的に行動することに対して消極的な面が見られることが課題として挙げられていた。周りの様子やできないことが気になり抵抗感をもち、本来の力が発揮されない様子も見られる。

全国学習状況調査質問紙回答においても、①自分にはよいところがある②分からないことがあったら自分で調べる③自分で計画を立てて勉強している、の3点がやや平均より低い。児童の根幹に自ら学ぶ姿勢を育成するには、授業の中で目標や進度の自己選択・自己決定場面や疑問を生み出すことができるような学習場面を設定する必要があると考えた。

したがって、次のような研究を行うこととした。

2. 活動・研究の目的（ねらい）

授業の中で、児童の実態に応じた多様な学びの選択肢を提供し、児童の自己選択・自己決定場面を増やすことにより、児童は主体的に学び続けることができ、各教科で育成すべき資質・能力をよりよく身に付けることができると考え、研究を行った。特に、多様な学びの選択肢の提供する学習方法として、単元内自由進度学習に取り組み、児童の自己選択・自己決定場面を増やすこととした。



3. 活動内容

(1) 「単元内自由進度学習とは何か」理論を学んだ

まず、単元内自由進度学習は、授業における学習方法の1つである。ある教科・単元の学習のはじめに行われる「ガイダンス」と、単元の学習の終わりに行われる「まとめの時間」を除いた、単元の学習展開中のほとんどを子どもが自分で学び進める学習方法である。今年度は、研究の1年次ということもあり、単元内自由進度学習の先進校である廿日市市立宮園小学校の取組をモデルにしながら、研究を進めた。研究を進めるにあたって、上智大学教授奈須正裕先生に理論研修会を行って頂き、理論を学び、共有した。また、東京学芸大学の佐野亮子先生にも来校して頂き、実践のご助言を頂いた。佐野（2023）は、単元内自由進度学習の教師の準備について、「図1のように事前準備は、大きく3つで構成されている。」¹と述べている。以下、これにしたがって、本校で行った工夫を述べる。

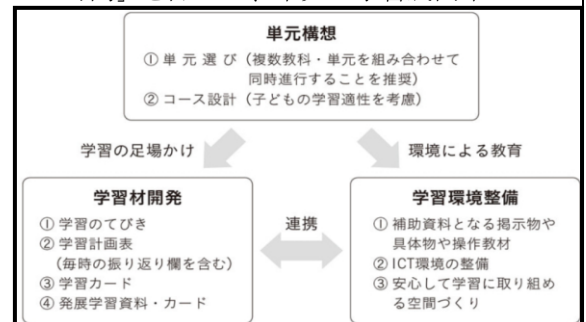


図1 単元内自由進度学習の準備（構成図）

¹ 奈須正裕 他『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』、北大路書房、2023年、143頁

(2) 単元構想を工夫した

①単元選び

単元内自由進度学習を行う際、本校では、複数教科同時進行で行った。複数教科で実践することにより、自己選択・自己決定場面が増える。子どもたちは、「どちらの教科からやるか」「今日は何をやるのか」など、自分で決められることが学習意欲につながった。また、授業中の学習の様子は、各々ばらばらになり、他人の進み具合が気にならなくなり、自分のペースで進めることができるという利点もある。実際、このような単元構想を行うことで、必然的に自己選択・自己決定場面が増え、主体的な学びとなった。

②学習コースの設計

複数の学習コースを設定し、子どもがコースを選択できる工夫を行った。学習適正に配慮した学習方法や課題を組み込む工夫をした。例えば、操作活動やものづくりといった体験的活動を組み込んだり、文字情報の他に視聴覚教材や動画でのヒントを活用したりした。また、単元の中で、単元の目標を達成するために必要に応じて取り組む学習コーナー（必修課題）と必修課題が終わった児童が楽しめるチャレンジコーナー（発展課題）を準備し、個別最適な学びの実現を目指した。

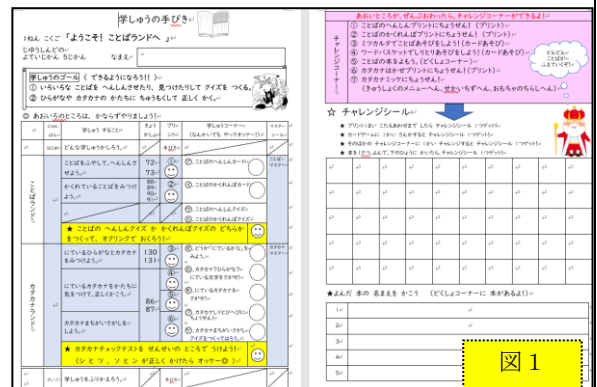
(3) 学習材の開発を行った

①学習の手引きと計画表

単元の学習内容が一目で分かるよう、1枚の様式にまとめた学習の手引きを作成した。学習の手引きには同時に、学習計画が書き込めるようにした。単元を見通した計画・振り返り・調整の経験を重ねていくことで、自分の学習をメタ認知することにもつながった。(図1)

②ワークシート

普段、一斉授業で言語化して行っている指示や発問を文字化するイメージで、どの児童も自分自身の力で進められるよう、丁寧に作成した。文字だけでは難しい児童への支援として、ヒント動画やヒントコーナーを設けるなどしながら、自力で課題を進められるようにした。



(4) 学習環境の整備を行った

①掲示物

子どもが自力で学習を進められるときの手助けとなる資料や操作教材などを掲示したり展示したりした。その際、児童が「やってみよう」と思えるよう、学びの雰囲気づくりを意識した。(写真1)

②情報環境

子どもが必要なときにいつでも利用できるよう、ICT環境を整えた。ミライシードのオクリンクを活用して、課題を提出させたり、理解の把握のためにドリルパークを活用したりして、児童の学習状況を簡単に把握できるようにした。また、ORコードを作成することで、ヒントや動画を見ることができるよう工夫も行った。(写真2)

③空間の整備

本校は、大規模校で空き教室がないため、環境づくりには苦慮した。その中でも、廊下やPCルームを改装して学習できる環境をつくったり、時間割を調整したりして、図工室や家庭科室を一時的に利用するなどして、児童が自由に学習できる環境づくりを行った。(写真3・4)



4. 子どもたちへの効果(○成果と▲課題)

このような、取組を行った結果、以下のような成果と課題が見られた。

○実践後のアンケート調査では、約9割の児童が、「単元内自由進度学習は楽しい」「またやってみよう」と答えていた。また、「チャレンジすることが楽しいか」という項目でも、約9割の児童が「楽しい」と回答し、年度当初より5%程度上昇した。これは、自由進度学習という、自己選択・自己決定せざるを得ない状況が生まれたことで、自分に最適な学習を選択・実践できたためではないかと考える。普段、一斉授業では、早く終わった児童は、待つことも多いが、自分のペースで進められることで達成感や充実感をより味わうことができているように感じた。

▲本校は、大規模校で、時間割の調整や学習環境の確保が難しい状況があったため、単元内自由進度学習に年1回または2回程度しか取り組むことができなかった。そのため、児童もこのような学習に慣れるまでに時間がかかったり、学習を進めることで精いっぱい楽しむ余裕がなかったりしている様子も見られた。普段の授業においても、自己選択・自己決定場面を増やすなど、単元内自由進度学習に限らず、主体的に学ぶことができる授業づくりを引き続き行っていく必要があると感じた。